

オレリエン・ハンクーの スイスへの誘い

日本に来た二人のスイス人



今回、日本での経験を綴って、高く評価された二人のスイス人を紹介したいと思います。二人の生きた時代も、経験した日本も違えども、このコラムを書いている私を始めとして、多くの西洋人に日本を届かせてくれた大切な人々です。

エーメ・アンペール (1819-1900) と ニコラ・ブーヴィエ (1929-1998) の話です。

エーメ・アンペール (Aime HUMBERT) は 1819 年にヌーシャテル州の時計職人の家庭で生まれましたが、スイスの動乱期の中で、実業家として、そして政治家として著しく出世しました。1862 年、スイス政府は徳川幕府との親善通商条約の締結を求める使節団を次々と開港が強いられる日本へ送りしました。団長はスイス時計製造組合会長、アンペールでありました。いわゆる「アンペール使節団」は 1862 年 11 月 20 日にフランスのマルセイユ港を出航し、海上での長い旅を経て 1863 年 4 月 9 日に長崎に着き、27 日に横浜港で投錨しました。幕府との交渉は、昔から幕府と深く関わってきたオランダを通して早速行われましたが、なかなか進みませんでした。幕府との交渉の合間に、アンペールたちは江戸などを探索して、たくさんのノートを綴ったり、スケッチを描いたり、写真、銅版画や浮世絵などを集めました。結局、スイス連邦と徳川幕府との間に修交通商条約は 1864 年 2 月 6 日 (今年の今で 142 年前!) に、現在の東京の長応寺において締結され、7 月にお互いに批准されました。これにより、長崎と横浜にスイスの領事館が、函館には副領事館が設置されました。



エーメ・アンペール

アンペールはスイスに戻り、1870 年に収集した銅版画などを挿絵に使い、『LE JAPON ILLUSTRÉ (幕末日本絵図、高橋邦太郎訳、雄松堂書店昭、全 2 巻など)』を出版しました。10 ヶ月間の滞在中に体験した日本の感想、京都、横浜、江戸などの町並みの描写、日常生活、日本人の風俗や習慣を内容としたもので、出版後に間もなく英語などに翻訳され、多くの読者を魅了しました。日本とその文化を欧州に伝える大きな一助となって、1873 年に発表されたかの有名な空想の紀行、ジュール・ヴェルヌの『80 日間世界一周』での横浜港の活写が、アンペールの著述を参考にしたとされています。

その後日本は明治維新を迎え、列強国の中に入り、日本はすっかり変わって、植民地化と工業化という時代のアジアに対する偏見も含まれていたのが、アンペールの本は絶版になりましたが、最近豪華に再版されました。幕末は現代日本の出発点であり、140 年前の、変貌する前の日本を目の当たりにした人の直接で正確な描写は値千金の大切な資料であり、『幕末日本絵図』はいまだに反響を及んでいます。

時代が変わり、天地が大きく揺れた後の高度成長期の幕開け



幕末日本絵図

に、絵に描いたような出世や豊満生活に背を向け、ヨーロッパ、中東、インドなどを放浪した末に、もう一人のスイス旅行者が日本に辿り着きました。旅行者の名は、ニコラ・ブーヴィエ (Nicolas BOUVIER)。

1929 年にジュネーブで生まれ、お父さんはジュネーブ市立大学・市民図書館の職員で、子供時代をジュール・ヴェルヌや紀行の読書に没頭しながら過ごしました。戦後にヨーロッパや北アフリカを訪れ、ジュネーブ大学で歴史と法律を勉強し始めました。1953 年 6 月に、卒業試験の結果発表を待たずに、画家の友人と車でユーゴスラビアへと旅に出ました。1954 年 12 月、トルコ、イランなどを経て、パキスタンで友人と別れ、一人でさらに東へとインドを通して中国を目指しましたが、治安が悪く、セイロン島 (現スリランカ) に渡りました。うつ病と熱に襲われ、7 ヶ月間苦労しました。1955 年 10 月 20 日、回復したブーヴィエは横浜で船を降りました。しばらく横浜で過ごしたのち東京に移り、新宿の荒木町に一年間滞在しました。世界との関係を問い直す日本社会のさらなる変貌を目の当たりにしながら、彼は下町的な庶民の文化や気質に魅了され、後に家族を連れて 1964 年から 1966 年まで、そして大阪万博の関係で 1970 年の 3 回にわたって日本に滞在しました。



ニコラ・ブーヴィエ

作家としてのキャリアは、旅立った 10 年後の 1963 年に始まりました。処女作『L'USAGE DU MONDE (世界の慣習、翻訳無し)』は紀行文のバイブルとなりました。彼の観察した物事を巧みに短く正確に表現する文学的な才能と詩的な感受性で、日本の歴史から当時の東京や各地の人々の慣習しやかな暮らしなどを 1989 年の『CHRONIQUES JAPONAISES (日本の原像を求めて、高橋啓訳)』に綴りました。ブーヴィエを読んでいると、空間、時間、そして様々な文化の差異と対峙する人間の肉体的、精神的な経験を共有できます。日本学の必読書とされるほど高く評価されています。後に、日本を観察する自分と、逆に日本人に観察される自分を、「周りが自分を面白がる様を自分も楽しんだものさ」と揶揄をこめて語ったそうで、彼の言っていることに共感できます。ニコラ・ブーヴィエには遠い祖先がいた、しかも同じスイス人だったとはこじつけの説明に思われるかもしれませんが、両方とも先端的な素晴らしい文章で、世界的に評価されています。そして、私が日本に憧れを持つようになったのはブーヴィエのおかげだったと言っていいほどで、皆さんもぜひ読んでみてください。



日本の原像を求めて

アンペールの『幕末日本絵図』についてもっと知りたい人のために次のホームページはお勧め!

<http://yushodo.co.jp/pinus/59/library/santiq/contents2.html>